合唱指導における協働的な学びの可能性
～学内発表会の実践から～

Possibility of collaborative learning in chorus instruction
From the practice of the on-campus presentation

ガハプカ　奈　美　　篠　部　信　宏
（音楽教育学専攻教授）　　（音楽教育学専攻講師）

本論文は，「合唱」は肉声で同じ空間での呼吸の流れでコミュニケーションを行うものであり，自分と誰かほかの人と一緒に行うことで初めて出来る行為であることを前提に，近年提言がなされている高大接続の改革や，アクティブ・ラーニングの要素を「合唱」の授業に取り入れることでより良い合唱活動が出来るようなプログラムの構築を目指し，これまでになかった他回生，他科目での連携を図り，枠にとらわれない授業のあり方での合唱指導を試みた。本論文の目的は，授業連携を試み，学習過程の質的改善をし，より良い協働的学びの実践することにある。

キーワード：合唱指導，合唱，合唱発表会，協働的な学び

はじめに

2012年８月中央教育審議会へ諮問が出され，今日に至るまで，様々な面で，高大接続改革に関する議論がなされている。高等学校教育の質の確保・向上，大学の人材育成機能の抜本的強化，能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価しうる大学入学者選抜制度への転換について提言がなされ，その答申では，抜本的改革を提言されている。

高大接続を考えるにあたり，当然，その以前の教育 - つまり中学校，小学校での教育の質に加え小・中接続の学びから考える必要があろう。

またその中で児童，生徒たちの多様化が一層進み，全ての児童・生徒たちに基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させるためには，ICT も活用して教師の負担を抑えつつ，専門性の高い教師がより支援が必要な児童，生徒により重点的な指導を行うことなどにより効果的な指導を実現し，児童，生徒たち一人一人の特性や学習進度 学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うとともに，児童，生徒たちに自ら学習状況を把握し，学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら粘り強く取り組む態度を育成すること，つまり「指導の個別化」が必要である。

基礎的・基本的な知識・技能や言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として専門性の高い教師が個々の子供に応じた学習活動を提供することで，幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供たちの興味･関心等に応じ，ICT も活用し，自ら学習を調整するなどしながら，その子供ならではの課題の設定，子供自身による情報の収集，整理・分析，まとめ・表現を行う等，主体的に学習を最適化することを教師が促す「学習の個性化」も重要である。
「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり，学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」と考えられる。

加えて，「アクティブ・ラーニング」（＝主体的・協働的な学び）の重要性も同時に考えて授業を構成していかねばならない[ii]。

「アクティブ・ラーニング」について，新学習指導要領（2020年～）に次のように示され

ている。

・資質・能力の三つの柱

・社会に開かれた教育課程

・主体的・対話的で深い学び

が挙げられ，学びのハイブリッド化が叫ばれている。

「アクティブ・ラーニング」の３つの視点から考える学習過程の質的改善に関して図にしてみると以下のようになる。

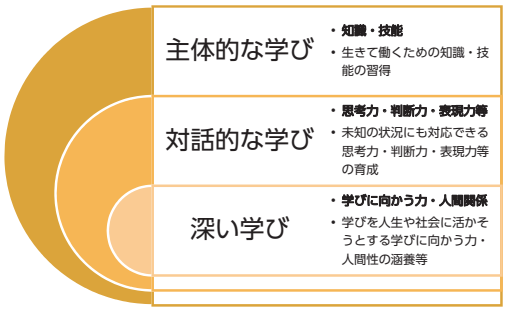


図１　学習過程の質的改善のイメージ図

協働的な学び…個別最適な学びの充実に当たっては それが孤立した学びに陥らないよう，留意する必要がある 。個別最適な学びの成果を協働的な学びに 生かし，さらにその成果を個別最適な学びに還元するなど個別最適な学びと協働的な学びの往還を実現 することが必要である。（『中間まとめ』p.15）[iii]

協働的な学びは学びの場で必要な事であるが，個々に対応した学びが最適な形で行われた上で協働的学びを行うからことより良い学びとすることが出来るという事である。そのことが，前述の高等学校教育の質の確保・向上，大学の人材育成機能の抜本的強化，能力・意欲・適性を多面的に育むことへとつながると考えた。

そこで，筆者らは，「合唱２」と「合唱指導法」の授業でより良い協働的な学びを実践すべく本論に述べるような取り組みを始めた。

１．「合唱２」と「合唱指導法」について

（１）「合唱２」シラバス内容

副題：校内合唱コンクールを体験しよう。

授業の到達目標：履修生が合唱の歌唱法を獲得し，自らが校内合唱コンクールに参加することで，教員になってから必要な指導法の基礎を理解することが出来る。

授業の概要：本授業は，合唱を実際に教育の現場で運用していくための経験をする。第２回目～第６回目では様々な合唱曲を実際に歌唱しながら，合唱歌唱のポイントとなる基礎を学ぶ。第７回目では，「合唱指導法」履修生による指導案を基にクラス分けを行い，第８回目からは実際に指導案に則って，「合唱指導法」履修生と協働して校内合唱コンクールを作っていく。第 15 回の最終日には，校内合唱コンクール（演奏発表会）を開催する。

授業計画

１．オリエンテーション

２．ア・カペラについて

３．ポピュラー曲の合唱曲について

４．宗教を背景に持つ合唱曲について（仏教讃歌）

５．宗教を背景に持つ合唱曲について（讃美歌）

６．様々な形態の合唱曲

７．校内合唱コンクールを実施するにあたって

<u>８．指導案の実施（クラスづくり）</u>

<u>９．指導案の実施（楽曲分析と解説）</u>

<u>10．指導案の実施（発声と発音）</u>

<u>11．指導案の実施（合唱することとは）</u>

<u>12．指導案の実施(合唱コンクールのチラシ制作)</u>

<u>13．指導案の実施（歌詞理解・曲想）</u>

<u>14．指導案の実施（まとめ）</u>

<u>15．校内合唱コンクール</u>

＊下線部は「合唱指導法」との連携授業

このような流れで「合唱２」では進めた。

（２）「合唱２」の授業内容とねらい

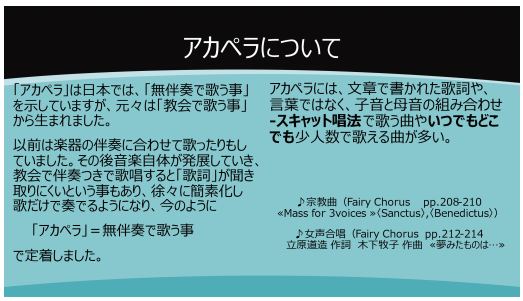
協働的な学びを充実するために，第１回から第７回の内容については個々人での学びが活かされるように，オリエンテーション時に，第２回から第６回に使用する合唱曲を発表し，教科書にない楽譜は配布をした。

その後，各選曲理由の説明および各楽曲にお

ける注意事項の説明を行った。事前に説明をすることで，知らない楽曲に対しての興味を引き出し，さらに自主的な練習を促すことにもつながると考えた。

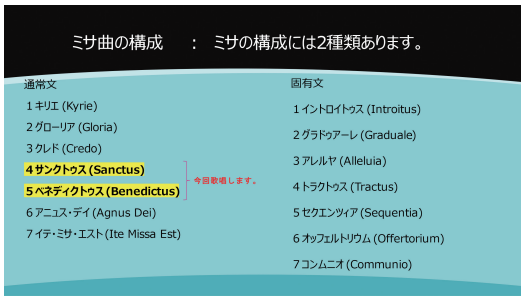
これは，図１で示した中で「主体的な学び」を引き出すための学習過程において最も重要と考えられる「知識･技能」のうち「知識」を指す。

第２回目には，ア・カペラについての知識と技能を同時に習得すべく，資料１のような視覚的に訴えられ，なおかつ履修生の手元に残る形で説明を行った。

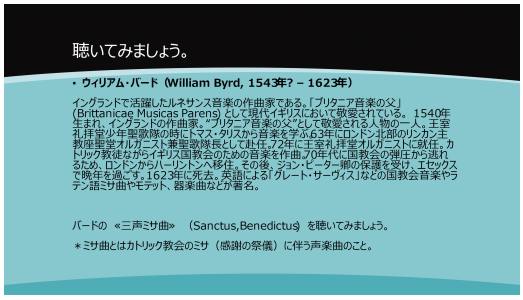


資料１　ア・カペラについての説明

そして実際に歌唱する楽曲については，ア・カペラの説明同様に視覚的に捉えやすいように，口頭での説明だけでなく，ミサ曲の構成を示したり（資料２），実際にア・カペラが生まれた教会で歌唱している映像を鑑賞したりした。



資料２　実際に歌唱するミサ曲についての説明



資料３　ア・カペラの作曲者の説明

ミサ曲２曲の鑑賞時は，自身の役割を楽譜でも確認しながら鑑賞することによって，図１で示した中で「対話的な学び」を引き出せる活動となった。

合唱活動は一人でできるものではなく，仲間と声を合わせることで成り立つ活動であり，本来常に「対話的な学び」が得られるものでもあろう。

次に日本語の歌詞でア・カペラ曲である≪夢みたものは…≫の歌唱に移り，言葉の違いからくる響きの違いについて考える活動を行った。

そのことで，履修者らは，「日本語は子音が少ないために母音をしっかりと歌う（伸ばしたり）べきだ」，「パートによって違う歌詞を歌う場合にどちらの歌詞もしっかりと聴こえる（伝わる）ように歌うのは大変だ」など気がつくことが出来た。さらに本学修を図１に挙げる「深い学び」へとつなげるために，各楽曲を録音・共有できるようにした。このことで各自が録音を良く聴き，自分の役割を見直し，パートの役割へと感覚を広げ，より良いハーモニーを求めるようになった。このことは「対話的学び」の中で表現力の向上や，「深い学び」の中での学びに向かう力へとつながっていった。

第３回目はこれまでと雰囲気も，歌詞の言語も全く変え，映画「天使にラブソングを２」より≪ Oh Happy Day ≫の歌唱に取り組んだ。普段クラシック音楽を中心に学修している者が多いため，本楽曲は，リズムに苦慮した者が多かった。それに加え，歌詞が英語であるため，英語での歌唱にもあまり慣れておらず，発音にも困難を見出す者があった。例えば，最初のフレーズで，「Oh,happy day!」の「DAY」の部分で１拍半伸ばすのだが，「Y」の発音はいつ歌うのか，あるいは，「When Jesus washed,」の「WASHED」の「ED」で４拍半伸ばすがどのタイミングでそれを発音するか等，自主的な練習をしていた際には全く問題にならなかったことが次々と出てきた。

履修生たちは，①疑問を全体に投げかける②パート毎に聴き合ってタイミングを揃えようとする　③全体で聴き合いながらタイミングを

揃えようとする。というような順番で解決していく姿が見られた。

これは図１で示した，「アクティブラーニング」の３つの視点から考える学習過程の質的改善と呼応していることがわかる。

「主体的な学び」－①疑問を全体に投げかける
「対話的な学び」－②パート毎に聴き合ってタイミングを揃えようとする
「深い学び」- ③全体で聴き合いながらタイミングを揃えようとする

第３回目までは，様々な言語で学びを深めてきたが，第４回目から第６回目は全て日本語の歌詞で歌唱する。

第４回および５回目（前半）は，仏教讃歌より≪太陽からの手紙≫，賛美歌より≪諸人こぞりて≫，≪神のみ子は今宵しも≫，そして賛美歌でもあるが，フランス民謡≪荒れ野にみ使い≫を学ぶ。第５回目（後半）及び第６回目は，女声合唱曲≪未来へ≫を学ぶ。

後半をすべて日本語での歌唱としたのには，大きく３つの理由がある。

１．日本語でのハーモニーの追究
２．楽曲における詩の理解
３．美しい日本語の発音を身につける

の３つである。

前半の３回で様々な音楽形態の楽曲，言語での歌唱とハーモニーの聴き合いを行った。後半には，楽曲誕生の背景は①仏教を背景に持つ楽曲，②キリスト教を背景に持つ楽曲，③ヨーロッパの民謡を用いた楽曲，④詩も楽曲も日本で合唱曲として誕生した楽曲の４種を用い，歌唱を行う。そのことによって，楽曲に込められた想いをいかに言葉にのせて歌唱すべきか母国語で五感を十分に使って感じ，歌唱することをねらいとした。

（3）「合唱指導法」シラバス内容

副題：合唱の指導法を学び，指揮ならびに指導を体験

授業の到達目標：様々な合唱作品に触れて指導の指針を自ら立て，魅力的な合唱を作る能力を養うことを目標とする

授業の概要：様々な難易度の合唱曲を取り上げ，その指導法を学習する。前半（第６回まで）は受講生による合唱をランダムに指定された学生が指導する形式で進め，後半（第７回以降）はグループに分かれて１回生の合唱指導をする。第 15 回には最後の仕上げとして校内公開の合唱コンクールを行う。

授業計画

1 オリエンテーション　課題曲配布
2 歌詞の分かりやすい邦人作品の指導から２声部　わたしと小鳥とすずと（石若雅弥）
3 ３声部　ヴォカリーズの多い作品　こんな夜には（大中恩）
4 ３声部　リズムの変化に富む作品　秋の野の花（大中恵）
5 ３声部　アカペラの作品　いっしょに（木下牧子）
6 ラテン語の作品　Ave Maria（ガブリエル・フォーレ）
7 グループに分かれて指導案の制作　曲目決定
8 指導体験　各パート内での音取り
9 指導体験　各パート内での音取り２回目
10 指導体験　各パート内での響きの調和
11 指導体験　他のパートと同時に歌唱
12 指導体験　他のパートと同時に歌唱２回目
13 指導体験　他のパートと響きの調和
14 指導体験　全体の表現を豊かにする工夫
15 校内合唱コンクール

＊下線部は「合唱２」との連携授業

（4）「合唱指導法」の授業内容とねらい

まず，第１回目の授業で第６回までに使用する楽譜を配布し，各曲を指導する学生を４人ずつ（最初の曲のみ３人）選び出し，授業内でピアノ伴奏する学生を決め，また合唱の歌唱を担当する学生をソプラノ・メゾソプラノ・アルトにパート分けも行った。そうすることで，履修生が第２回から第６回まですべてに使用する楽譜について自身に合わせた速さで，また，パート毎のメンバーが既にわかっているため，それらの研究（教材研究）を具体的に行う事が出来，指導をスムーズにすることをねらいとしたため

である。

また，配布した楽曲の選曲に関しては，第８回以降の授業で合唱２のクラスの学生を指導できる基礎を築くため，曲は徐々に難易度があがっていくような選曲をした。

そうすることで授業内での指導も回が進むごとに複雑かつ，授業の内容を計画的に行わねばならなくなる。

合唱を指導するにあたっては，指導者の楽曲研究のあり方が他科目の授業での教材研究同様に重要であることは言うまでもない。合唱の指導者は，その時々にその場で起きる「声と声の表現のぶつかり合い」を即座に分析し，正確にメンバー全員にわかる言葉で簡潔に伝える必要がある。その伝える力は当然，指導者による十分な知識と事前のトレーニングが必要となる。第２回からは履修生一人 15 分ほどの時間を使って，実際に学生が授業に見立てて指導することとした。その中で，効率的なパート練習のさせ方や言葉の発音の指導法，パート内及び全体での響きや縦の線の揃え方，合唱指揮の仕方等を重点を置き，履修生同士が意見交換をしながら進める事により，より深く一つひとつの授業での指導法を深めることをねらいとした。

履修生全員が，指導する側，指導される側，両方の立ち位置を経験，合唱指導の知識を得る事が出来るように工夫した。また，意見交換している中で，音楽教育学専攻の３回生同士という事で，いわゆる教育の現場での実際については，生徒役の学生にも音楽に関する素養があることで，かなりスムーズに進むことが多かった。例えば，全く新しい楽曲に対しても譜読みは早く，音程を外す事も少ない為，実際の中学校及び高等学校における教育現場での指導よりはるかに指導しやすい状況であろう。そこで，指導役の学生には，楽譜の読めない生徒に対する指導の声かけの仕方や説明の仕方，あるいは音の外れる生徒に対する注意も付け加えながら教員がその場でより良い方法をフィードバックして進めた。

次に具体的指導内容について述べる。

学生は主旋律を受け持つパートの入れ替わり時にそのパートへ目線を送り視線で指示する方法，歌詞を皆で朗読し重要な部分を意識させる，難しい所を部分的に実際に歌って聞かせる，手拍子で遅れがちなテンポを維持する，内声部の音が取りにくい部分は和音を聞かせる等，各自が自主的により良い方法を模索して指導をしていた。

また合唱２の１年生との授業では３年生ほど合唱に慣れ親しんでいないため，実際の教育現場の環境へ近づいたと言える。

２．協働授業の前準備について

本専攻での「合唱」に関する授業は，「合唱１」と「合唱２」が用意されており，「合唱１」に関しては，中学校・高等学校音楽科教諭免許状取得要件に含まれているため，後期に備えて授業の進め方や声かけによって協働的な学びを行うための心の準備をおこなった。

今年度は特にコロナ禍という事でこれまでのように常に多人数で歌唱することが難しいと判断し，ICT [iv]教材を導入するのに適していると判断し，中学校，高等学校において必要な合唱に関する知識および歌唱技術を身につけるため

表１ 「合唱 1」の進行

シラバス	授業内容
1. オリエンテーション	LMS で第５回までの資料を事前に配布（ICT 教材）し，今後の進行について説明をした。また使用楽譜については全ての楽譜を配布した。
2. 合唱の意義を考える	PC を使用し，楽譜の起源を学び，当時の歌唱を再現している音源を視聴する。（ICT 教材）
3. 合唱の歴史を楽曲で辿る（中世からルネッサンス・バロック）	PC を使用し，様々な形態での合唱曲を視聴した。（ICT 教材）
4. 合唱の歴史を楽曲で辿る（古典派・19 世紀以降）	同上
5. 降誕会での演奏発表（5 月 21 日㈮）	降誕会は中止となったが，仏教讃歌の合唱曲について学修した。LMS でのワークを行った。（ICT 教材）

6. 呼吸法	LMS に挙げた資料を基に呼吸法を行った。(ICT 教材)
7. 発声法	LMS に資料は挙げた（ICT 教材）が，ここでは PC などは使用せずに対面で行った。
8. 中学校音楽科でのクラス合唱について考える	デジタル教材を用いた
9. クラス合唱曲の教材研究	デジタル教材及び LMS の資料（ICT 教材）を用いて学修した。
10. クラス合唱曲の歌唱（1 年生）	デジタル教材を用いながら実際に歌唱することで学修した。
11. クラス合唱曲の歌唱（2 年生）	デジタル教材を用いながら実際に歌唱することで学修した。
12. クラス合唱曲の歌唱（3 年生）	デジタル教材を用いながら実際に歌唱することで学修した。
13. クラス合唱曲の歌唱（同声合唱曲）	デジタル教材を用いながら実際に歌唱することで学修した。
14. 女声合唱曲	これまでのまとめと発表会に向けて練習を行った。
15. 合唱発表会	コロナ感染対策を十分にした上，合唱発表会の開催をした。

の計画をした。その際，ICT 教材は表１のような過程で用いた。

以上のように「合唱１」の授業では，コロナ禍という事もあり，履修生同士の接触を最低限にするために，個別学修が可能な面は，LMS に事前に教材を挙げ，各自がそれらを視聴したり，深めたりすることでそれぞれ楽曲に対して学修を深めた上で実際に歌唱する授業に臨むことで接触を最低限に控えることが出来た。

また，各々が取り組んだワークに関しては，個別にフィードバックを行う事でその学びがより具体的で，一人ひとりの抱える課題解決の糸口をつかむきっかけともなった。そのような意味では，ICT 教材やデジタル教材は有効なものである。

一方，先に述べた「協働的学び」による歌唱に関しては，特別にグループ分けをするなどしてディスカッションを行ったり，パート毎に練習を行ったりすることが困難であったため，歌唱する際に「聴き合う力」を育む声かけをすることで補った。

各々が個別にワークで学びえた知識を歌唱表現にのせて短い時間ながらもその場で歌唱することにより，言葉を用いなくとも演奏を通して感じ合いながら自然に調整をする力がついたのではないかと考える。

３．「合唱２」，「合唱指導法」との協働による効果について

まず最初に「合唱２」と「合唱指導法」の各授業７回かけて学修してきた内容を第８回では合唱曲を演奏することから始め，互いの歌唱による表現の交換を行うことにした。

「合唱は社会の縮図」と良く言われるが，自分たちが学修してきたことを合唱曲で表現することにより，言葉での自己紹介をするよりもより効果が高く，今後の授業進行に有益だと判断したためである。

（1）「合唱２」の発表曲

「合唱２」では，二部合唱曲≪未来へ≫谷川俊太郎詩　信長貴富作曲の発表をすることとした。本楽曲を選曲した理由は大きく２点ある。

１点目は，本楽曲は 2008 年に混声四部合唱曲として初演されたが，作曲者の信長貴富の「子どもたちにも歌ってほしい」という強い想いにより 2009 年に教育雑誌である『教育音楽・小学版』に掲載された。この機会に同声二部合唱へと編曲されたものである。また，信長は，「子どもたちの声を想定してきた同声二部版ですが，大人の女声合唱団が歌っても素敵なものになると思っています。谷川さんの詩はどの世代の人々にも開かれた内容を持っていると思うからです。」[v] と述べているように，将来指導者となる履修生たちが本楽曲を自ら歌唱しながら内容研究をすることで，そこで育まれた感性がまた次へと引き継がれるのではないかと考えたことである。

２点目は，谷川俊太郎によって書かれた詩そのものが履修生たちへのメッセージになると感じたからである。

また，本詩に関しては，中等科第２学年国語

科（東京書籍）にも採用されていることから，詩の解釈をすることの重要性も同時に学ぶことが出来ることが挙げられ，これまで学んできた楽曲に関してあるいは，今後学んでいく楽曲に関しても「歌詞」に対する考え方を同時に学んでほしいと考えたことが挙げられる。
以下に「合唱２」第６回，第７回授業で学んだ内容を，詩と共に記しておく。

未来へ　　谷川俊太郎

道端のこのスミレが今日咲くまでに
どれだけの時が必要だったことだろう
この形この香りは計り知れぬ過去から来た

遠く地平へと続くこの道ができるまでに
どれだけのけものが人々が通ったことだろう
足元の土に無数の生と死がうもれている

照りつけるこの太陽がいつか冷え切るまでに
目に見えないどんな力が働くのだろう
私たちもまたその力によって生まれてきた

人は限りないものを知ることはできない
だが人はそれを生きることができる
限りある日々の彼方をみつめて

未だ来ないものを人は待ちながら創っていく
誰もきみに未来を贈ることはできない
何故ならきみが未来だから

＊下線筆者

本詩は「口語自由詩」である。元々書かれた詩は，５連から構成されるが，合唱曲になっているのは下線部を除く第1，2，4，5連であり，第４連では，一部言葉の省略が見られる。

詩を読むと，第１連から第５連に向けて単語を見ると目線の動きを表す単語で時制の変化があるのがわかる。

授業では，上記のように歌詞の時制についてまず着目するための学修をした後，声に出して朗読した。そうすることで，詩の構造のみでなく楽曲の構成についても感じることが出来た。

表２　詩にある単語に見る目線と時制

詩	単語	目線・時制
第１連	道ばた，スミレ	下・過去
第２連	この道，足元の土	下・過去
第３連	太陽	上・未来を見る
第４連	彼方	前・人間の可能性
第５連	未来	前・人間の可能性

（2）「合唱指導法」の発表曲

「合唱指導法」からは，ガブリエル･ユルバン･フォーレ（Gabriel Urbain Fauré, 1845-1924）作曲による独唱曲 Ave Maria Op.67 No.2 をガブリエル・トーマス（Gabriel Thomas,1957 - ）が女声三部合唱へ編曲を施している楽譜を使用して発表を行う。

本楽曲を選曲した理由は，「合唱指導法」では，前述のように，第７回までに取り扱ってきた楽曲は第１回目から，言語・和声・旋律・バランス等徐々に難易度が上がるように選曲してきた。その中で，Ave Mariaは，和声が複雑であり，旋律の歌唱に関しても難易度が高く，歌詞も日本語ではなく，現代のヨーロッパの言語に何らかの影響を与えたラテン語である点が挙げられる。

歌詞はキリストの母，マリア様を讃える音楽という意で始まる内容であるが，本楽曲 Op.67 第１曲（SalveRegina）と第２曲（Ave Maria）は，同じテキストのテーマと構造を持っているにもかかわらず，それぞれのテキストを作曲技法や和声の構成で明確な違いを出している。その違いは，第１曲の SalveReginaは，熟考的でエーテル的な力を秘めている。また，独特のメロディックを持ち，高いテッシトゥーラ[vi]を控えめに使用している。第 ２曲の AveMariaも熟考的ではあるが，同時に明白にメロディックであり，第１曲の Salve Reginaとは対照的のようでもある。さらにすべての声部において全範囲を劇的に，あるいは朗読的に使用しているところに特徴が見出すことが出来よう。
次のラテン語の歌詞とその意味を記す。

Ave Maria　アヴェ・マリア
（ラテン語）
Ave Maria, gratia plena,
Dominus tecum,
benedicta tu in mulieribus,
et benedictus fructus ventris tui Jesus.
Sancta Maria ,Mater Dei,
ora pro nobis, nobis peccatoribus,
nunc, et in hora, in hora mortis nostrae.
Amen, Amen
（日本語）
アヴェ・マリア　恵みに満ちた方
主はあなたとともにある
あなたは女性の中で祝福され
ご胎内の御子イエスもまた祝福されています
聖なるマリア 神の母
わたしたちのためにお祈りくださいわたし
た　ち罪びとのために
死を迎える時も今も，そして
アーメン，アーメン

歌詞内容の出典自体は，聖書や教会での祈祷で使われた文言を組み合わせて，中世にまとまったものとなり，現在に歌い継がれている。

このように楽曲自体は短くとも非常に多くの情報が詰まっている合唱曲を，履修生が合唱を指導する立場としてどのような思いを持って指導し，歌唱するかという点を履修生が自ら考え，表現してほしいという願いを込めたものである。

４．総合的考察と今後の課題

教育の現場は常に人と人とのかかわりあいで成り立っており，一瞬たりとも「同じ」の無い，新しい瞬間の連続である。その中で歌唱 - 合唱することでの協働的学びのねらいは，漠然と何かを一緒に行う事で出来上がるものではなく，そこに居る一人ひとりが自分の歌唱表現を体験的に見出し，自分の事としてとらえる事にある。

前期から後期へのつながりを重視しながら本プログラムの完成を目指してきたが，やはり，コロナ禍であることが対面での授業に影響を与えたことは大きな課題となった。しかしながら，教材の用い方や発問の方法を工夫することで，①指導の個別化② ICT の活用がより一層深めることが出来，対面であっても短時間でアクティブ・ラーニングへの学び - 協働的な学びへとつなげることが出来た。

例えば，歌詞の解釈について，まず個々人が詩を読み込み深めることで，言葉および楽曲への理解が深まり，
まるで詩に映像や絵が付いているかのような解釈が出来るように変化していった。歌詞を読み込むことで楽曲への理解が深まり，その詩の世界を疑似体験しているような気持ちになったようである。

それには，正確に歌詞も楽曲も解釈する必要がある。

そういう意味で，合唱は教材として取り上げる題材を良く研究し，厳選する必要があり，それらの真意を理解した上で歌唱していくべきであり，その真意を演奏しながら伝えることは教師としての重要な役割ともいえよう。

異回生でなおかつ２つの授業を合同で行う初めての試みであったが，枠にとらわれず様々な音楽経歴を持った学生同士が自らの学びを表現し合える場を提供できたことは履修生にとっても，我々担当者らにとっても非常に有意義な時間であり，合唱教育の奥深さと重要性を感じた時間でもあった。

一方で，各授業内で歌う時間が短くなると感じたり，もっと長い時間一人で指導してみたいなどと感じた履修生も少なからずいたものと感じている。

今後様々な挑戦的試みから教育的価値を見出し，どのような社会的変化が訪れようとも，様々な問題に対応しつつ新たな合唱教育を目指し学びの可能性を検討していくつもりである。

＊執筆に関して，１．（２）及び３．（２）その他「合唱指導法」に関する章 - 節は授業担当者である篠部が担当し，その他の章 - 節に関しては，「合唱１」，「合唱２」の授業担当者であるガハプカが担当した。

i 高大接続改革の議論・検討の流れ　文部科学省参照

ii 高大接続答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために～　中央教育審議会　2014 年 12 月　参照

iii 中央教育審議会初等中等教育分科会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（中間まとめ）』（2020 年 10 月 7 日）

iv ICT とは,「Information and Communication Technology」であり，意味自体は，情報通信技術である。ここでは，LMS を通して学生個人が PC を用いることで，画像や動画などを使って視覚，聴覚に訴えかける効率的な学修を進めるために使用をした。

v 二部合唱曲≪未来へ≫音楽之友社 2021 年第 6 刷のピース出版解説による。

vi テッシトゥーラ（Tessitura 伊語）とは，音楽において特定の前後関係における音高のまとまりの事を言う。通常は，声楽曲や楽曲における声楽パートに適用する。

【文献】

・教芸音楽研究グループ編　女声合唱曲集クラス用 Fairy Chorus 教育芸術社　2012

・京都女子大学発達教育学部教育学科音楽教育学専攻編「未来をひらく音楽科教育」- 中学校・高等学校教員養成課程における課題と展望 DTP 出版　2017

・京都女子大学・京都女子大学短期大学部編　仏教讃歌　女声合唱集　響流　平成 10 年

・鈴木正幸・大島眞　「21 世紀の感性教育」- スズキ・目ソードの理論と背景 -　六甲出版　1999

・中等科音楽教育研究会編　「最新　中等科音楽教育法」2017/2018 年告示「中学校・高等学校学習指導要領」準拠　音楽之友社　2019

・ヤマハ株式会社編　「ヤマハデジタル音楽教材合唱練習 vol.2」

・尹雄大「やわらかな言葉と体のレッスン」春秋社 2015